



岐阜

岐阜

総

文

他都道府県生徒と観光地取材
締め切りに追われる新聞作成

7月31日から8月5日で行われた高校文化部のインターハイ、第48回全国高等学校総合文化祭岐阜大会が開催された。昨年すべての県を周り終え、今回から2巡目になる。新聞部門は8月1日から3日まで中津川市の東美濃ふれあいセンターで行われた。6つのコースを各班が全国の新聞部員と取材してその内容を交流新聞としてまとめた。

←大会初日すでに疲れている部員2名
東美濃ふれあい文化センターにて



7月31日から8月5日で行われた高校文化部のインターハイ、第48回全国高等学校総合文化祭岐阜大会が開催された。昨年すべての県を周り終え、今回から2巡目になる。新聞部門は8月1日から3日まで中津川市の東美濃ふれあいセンターで行われた。6つのコースを各班が全国の新聞部員と取材してその内容を交流新聞としてまとめた。

完成し全員で達成感を味わった。ちなみに講師では急ぎ過ぎたあまりやつてしまったNGなレイアウトを指摘され反省(すみません...)その後他校の活動や閉会式が行われまだまだ努力が足りないと感じた部長でした。こうして長かったようであっという間に総文祭は幕を閉じ来年の香川県へと引き継がれた。



↑引き継ぎの様子 左)今年開催の岐阜県 右)来年開催の香川県
両端は両県のマスコットキャラクター

美濃焼生産量6割を占める土岐市 改名を期に一般販売開始

織部ヒルズ 藤田陶器 藤田さん「用途に合わせた食器を提供」



↑「土岐市は岐阜県の中でも有数の生産地」と話す
社長の藤田さん

岐阜県現代陶芸美術館を取材した。今回は、東美濃地域(土岐市、恵那市瑞浪市)の一つ土岐市の織部ヒルズと多治見市の岐阜県現代陶芸美術館を取材した。織部ヒルズは一九七三(昭和四十八)年に土岐美濃焼卸商業団地として始まった。当時は物流が鉄道からトラックに移り変わった時代。トラックで素早く安全に運搬する方法を確率しようとしたこの地に建設。現在は53の商店・工場が立ち並び卸団地としてさらなる発展を遂げている。織部ヒルズの一角にある藤田陶器株式会社を今回取材させていただいた。この会社は主に飲食店用食器を製造・販売。約200社を担当し各企業のオリジナル食器も製造している。その傍ら30〜40代の女性をターゲットとしたデザインの家計用食器も販売されている。元々この店は飲食店用食器のみを取り扱う店だった。(織部ヒルズ自体が商業食器を扱う場所だった)しかし、二〇〇二年織部



↑藤田陶器株式会社で販売されている一般家庭食器。色は薄く料理を引き立てるものが多い

世界各地の陶芸品を収集 個性豊かな展示実施

岐阜県現代陶芸美術館

岐阜県現代陶芸美術館は現代の陶芸作家による作品を一点ものから量産品まで幅広く収集。その上でテーマやコンセプトにあった展示が毎回行われている。私たちが訪れた際には北欧の陶芸作家『リサ・ラーソン』の作品が展示(現在は終了)されていた。



↑リサ・ラーソン
アフリカシリーズ『ライオン』
1964年作
※特別に許可を頂いて撮影しています

織部焼 名称は茶人が由来 多様な文化を導入した焼物



↑古田織部肖像画
古田織部美術館蔵

美濃焼を代表すると言っても過言ではない織部焼。誕生したのは織田信長らが活躍した安土・桃山時代。この時代に千利休の弟子である茶人・古田織部(一五四三または四四一〜六一五)が自分好みの柄を茶器に取り入れたことが名称の由来とされている。織部の種類は7つほど。それぞれ用いる土や釉薬(陶磁器の表面に塗布したガラスの層で、色や装飾、強度、汚れにくさなどの役割を果たすもの。現在では汚れが付きにくい釉薬も開発されている)が異なる。また、織部の特徴として、絵柄に様々な文化が取り入れられていく。例として、着物柄の柄をそのまま焼物に転用する。市松模様を用いるなど、当時からかなり斬新なものとなっていた。古田織部は美濃焼の革命期に影響を与えたが織部焼と彼を関連づける資料はほぼ残っていない。どんな人物か詳しく知りたいものだ。(藤)

肖像画は古田織部美術館のご厚意で使用しています

説

▼驚くことに伝統工芸品は全国で241品目(令和5年10月現在)ある。

▼近年、伝統工芸の後継者が不足が問題視されている。実際、今回取材させて頂いた場所でも後継者が不足が課題だと話された。原因はいくつかある。考えられるのが一つは将来性が見えないこと。職業だといふ人継が子になるには職業的知識が必要。入るには必し子何業員ではない。が給料は発生しない。その

▼海外に注目されている伝統工芸。存続のために興味を持つ必要がありそうだ。(藤)